

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Commentaries on the Zhongguo xiaoshuo shilue : Lu-xun's a brief history of Chinese Fiction XIX

メタデータ	言語: zho 出版者: 公開日: 2003-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中嶋, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/809">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/809</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 中國小說史略考證 第十九

中 島 長 文

## 第十九篇 明之人情小說（上）

1 當神魔小說盛行時、以至故或亦謂之「世情書」也

一七十一

『大略』寫印本には『金瓶梅』及びその續本に關する記述はない。つまり第一九篇全體に相當する部分がない。『大略』鉛印本以下『史略』各版の間には句讀點の僅かな違いを除いて異同はない。『金瓶梅』に關する敘述をなぜ小説の講義から省いたのかは大きな疑問だが、答えは未詳とするしかない。『大略』寫印本は最初の試みであつたから、あるいは大學に於ける講義という形態そのものの制約から省かれたのかもしれない。

「小説的歴史的變遷」第五、明小説之兩大主潮云、一、講世情的 當神魔小說盛行的時候、講世情的小説、也就起來了、其原因、當然也離不開那時的社會狀態、而且有一類、還與神魔小說一樣、和方士是有很大的關係的。這種小説、大概都敘述些風流放縱的事情、間于悲歡離合之中、寫炎涼的世態。

「竹坡閑語」云、（前略）然則『金瓶梅』我又何以批之也哉。我喜其文之洋洋二百回、而千針萬線、同出一絲、又千曲萬折、不露一線。閉窗獨坐、讀史、讀諸家文、少暇、偶一觀之、曰、如此妙文、不爲之遞出金針、不幾辜負作者千秋苦心哉。久之、心恒怯焉、不敢遽操管以從事、蓋其書之細如牛毛、及千萬根共具一體、血脈貫通、藏針伏線、千里相牽、少有所見、不禁望洋而退。邇來爲窮愁所逼、炎脈所激、於難消遣時、恨不自撰一部世情書、以排遣悶懷、幾欲下筆、而前後結構、甚費經營、乃擱筆曰、我且將他人炎涼之書、其所以前我經營者、細細算出、一者可以消我悶懷、二者算出古人之書、亦可算我今又經營一書、我雖未有所作、而我所以持往作書之法、不盡備於是乎。然則我自做我之『金瓶梅』、我何暇與人批『金瓶梅』也哉。（康熙乙亥在滋堂本『批評第一奇書金瓶梅』。今據黃霖編『金瓶梅資料彙編』一九八七・中華書局本）

2 諸「世情書」中、以至遂有「苦孝說」冠其首

一七九十五

『大略』鉛印本が「唐順之者」の「者」を「箸」に誤る外は各版の間に異同はない。

『小説舊聞鈔』『金瓶梅』引（『野獲編』二十五）云、袁中郎「觴政」以『金瓶梅』配『水滸傳』爲外典、予恨未得見。丙午、遇中郎京邸、問、「曾有全帙否。」曰、「第觀數卷、甚奇快。今惟麻城劉延白承禧家有全本、蓋從其妻家徐文貞錄得者。」又三年、小修上公車、已攜有其書、因與借抄挈歸。吳友馮猶龍見之驚喜、愆患書坊以重價購刻。馬仲良時權吳關、亦勸予應梓人之求、可以療饑。予曰、「此等書必遂有人板行、但一刻則家傳戶到、壞人心術、他日閻羅究詰始禍、何辭置對、吾豈以刀錐博泥犁哉。」仲良大以爲然、遂固篋之。未幾時、而吳中懸之國門矣。然原本實少五十三回至五十七回、遍覓不得、有陋儒補以入刻、無論膚淺鄙俚、時作吳語、櫛前後血脈、亦絕不貫串、一見知其贗作矣。聞此爲嘉靖間大名士手筆、指斥時事、如蔡京父子則指分宜、林靈素則指陶仲文、朱勔則指陸炳、其他各有所屬云。袁中郎の「觴政」が『金瓶梅』を酒經の「外典」であるとするのは、沈德符の誤りを魯迅が踏襲したのだ、と『全集

注』が指摘するのはその通りである。「觴政」「十之掌故」は次のように言う。

凡六經、語、孟所言飲式、皆酒經也。其下則汝陽王甘露經、酒譜、王績酒經、劉炫酒孝經、貞元飲略、竇子野酒譜、朱翼中酒經、李保績北山酒經、胡氏醉鄉小略、皇甫松醉鄉日月、侯白酒律諸飲流所著記傳賦誦等為內典。蒙莊、離騷、史、漢、南北史、古今逸史、世說、顏氏家訓、陶靖節、李、杜、白香山、蘇玉局、陸放翁諸集為外典。詩餘則柳舍人、辛稼軒等、樂府則董解元、王實甫、馬東籬、高則誠等、傳奇則水滸傳、金瓶梅等為逸典。不熟此典者、保面甕腸、非飲徒也。〔袁宏道集箋校〕卷四八・一九七九・上海古籍出版社本。

沈德符が「逸典」とすべき所を「外典」と誤ったのは最初からのようで、魯迅が見た『萬曆野獲編』に編纂される前の「顧曲雜言」ですでに「外典」に作っている。(俞樾『茶香室叢鈔』卷二三「袁中郎觴政」參照)。

「三大奇書」について、『全集』注は『續金瓶梅』の西湖釣叟の序に「今天下小説如林、獨推三大奇書、曰『水滸』、『西遊』、『金瓶梅』者、何以稱乎。『西遊』闡心而證道於魔、『水滸』戒俠而崇義於盜、『金瓶梅』懲淫而炫情於色、此皆顯言之、誇言之、放言之、而其旨則在以隱、以刺、以止之間。唯不知者曰怪、曰暴、曰淫、以為非聖而畔道焉。」と言ふのを舉げる。また作者である紫陽道人、櫛ち丁耀亢の「凡例」でも「小説以『水滸』『西遊』『金瓶梅』三大奇書為宗、概不宜用之乎者也等字句。」と述べる。「三大奇書」という言葉こそないが、その先蹤と考えられるものに「幽怪詩譚小引」の記述がある。「不觀李温陵賞『水滸』、『西遊』、湯臨川賞『金瓶梅詞話』乎。『水滸傳』、一部『陰符』也。『西遊記』、一部『黃庭』也。『金瓶梅』、一部『世說』也。」と言ひ、「時崇禎己巳陽生日聽石居士題於綠窗」と署す。「崇禎己巳」は崇禎二年、西紀一六三九年である。明末すでに三書を並稱するやり方があったことが分る。もとづく所が全く分らないが『桂宮梯』という書に徐謙という人が「李卓吾極讚『西廂』、『水滸』、『金瓶梅』為天下

奇書。不知鑿淫竇、開殺機、如釀鴆酒然、酒味愈甘、毒人愈深矣。有聚此等書、看此等書、說此等書、借貫此等書者、罪與造者買者同科。(第四卷引『最樂編』)と述べているのを舉げておいてもよいかもしれない。(以上すべて黄霖編『金瓶梅資料彙編』に據る。『桂宮梯』、徐謙については未詳。黄霖書の排列の順からすれば、阮葵生の前に置かれていたので清末の人らしい。)しかし「三大奇書」という言い方は案外少なく、『三國志演義』を含めた「四大奇書」という呼稱の方が多いようである。これは管見では李漁が毛宗崗評本の初版本に附けた「三國志序」文中の記述が早い。「昔弇州先生有宇宙四大奇書之目。曰『史記』也、『南華』也、『水滸』與『西廂』也。馮猶龍亦有四大奇書之目、曰『三國』也、『水滸』也、『西遊』與『金瓶梅』也。兩人之論各異。愚謂書之奇、當從其類。『水滸』在小説家、與經史不類。『西廂』繫詞曲、與小説又不類。今將從其類以配其奇、則馮說爲近是。」と言い、後に兩衡堂刊本に附された「三國志演義序」の冒頭でも同様のことを言う。馮猶龍の説とは、彼の作とされる『魏忠賢小説斥奸書』の崢嶸主人(馮猶龍かどうか未詳)の「凡例」に「是書動關政務、事系章疏、故不學『水滸』之組織世態、不效『西遊』之布置幻景、不習『金瓶梅』之閨情、不祖『三國』諸志之機詐。」と見えるが如き竝稱を指すものか。四書の竝舉は當時より見られ、明末では『禪真逸史』の夏履先の「凡例」、『韓湘子全傳』の煙霞外史の「敘」、清に入っては劉廷璣『在園雜誌』卷二・三ですでに「四大奇書」と稱し、李綠園「歧路燈自序」、閑齋老人の「儒林外史序」以下皆それらに效う。上述の資料によれば『續金瓶梅』が順治の初で、李漁の「三國志序」が康熙十八・九年だから「三大奇書」の方が早いわけだが、實際に慣用語として使われたのはどちらが先だとは決めがたい。

「日本語譯本に對する著者の言葉」云、……小説史に關することは時としてまだ注意を向けることもある。そのやや關係の大なる事を言へば、(中略)もう一つは北平で「金瓶梅詞話」が発見され今まで通行してゐた同書の祖本であり、

文章は今本より粗雑だが對話はみな山東の言葉でかかれ、決して江蘇省の人、王世貞の作でないことが確實に證明された。(後略)。(サイレン社版『支那小説史』)

「萬曆庚戌本」。これは沈德符の記述に據つて推定した魯迅の誤りだと考えられる。現在では沈德符の言う吳中刊本こそ、一九三二年北京で發見された『金瓶梅詞話』本に他ならないとする説が行なわれている。『金瓶梅資料續編』(一九九一・北京大學出版社)の周鈞韜「前言」參照。ただ吳中刊本がいま見られる詞話本であるなら、沈德符が欣子の「序」に言う『金瓶梅』の作者たる「蘭陵笑笑生」に一言も言及しないのはいかにも不審である。

『野獲編』で、鈔本の第五三回より五七回が原缺であることを、吳中刊本の刊刻時に補寫したというのは、沈德符がその眼で確かめたのだから信じてよいと思われる。その補寫は、萬曆丁巳四五年(一六一七)序刊の『金瓶梅詞話』と、崇禎間刊と考えられている『新刻繡像批評金瓶梅』との、第五三・五回に於ける違いとあるいは何らかの関係があるかもしれない。

『魯迅藏書目錄』 子部九小説家類云、金瓶梅詞話 一百回 明蘭陵笑笑生著 民國二十二年(一九三三) 北平古籍小説刊行會影印明萬曆四十五年刻本 二十一冊 毛裝 圖據明崇禎間刻本影印

又平裝部分五文學、五小説・童話云、支那第三奇書多妻鑑 一百回 明 蘭陵笑笑生著 清 張竹坡評 香港一夫一妻世界會印

前者については、『日記』一九三三年五月三二日の條に記載があり、「上午收到北平古佚小説刊行會景印之『金瓶梅詞話』一部二十本、又繪圖一本、豫約價三十元、去年付訖。」といい、「書帳」にも記録がある。「日本語譯本に對する著者の言葉」にいう北平で發見されたそれである。後者については發行時期等未詳、書録の類にも見えない。

『金瓶梅』の刊本には大約三種の系統があり、それらはいずれも繼承關係にあると見なされている。第一は『新刻金瓶梅詞話』十卷百回、明萬曆刻本、卷首有欣欣子序、萬曆丁巳東吳弄珠客序、甘公跋。一九三二年に山西省で發見され、後北京圖書館に入ったものと、日光輪王寺慈眼堂藏本、徳山毛利氏棲息堂藏本が知られ、一九三三年には北京古佚小説刊行會が北京圖書館本を影印刊行して世間に流通した。一九五七年には文學古籍刊行社が古佚小説刊行會本により修版補足した影印本を出版。一九六三年には日本大安が慈眼堂本に棲息堂本を補配して影印刊行した。一九三三年以降詞話本に據る排印本が相當數刊行されたが、ほとんどが所謂猥褻な部分を刪つた刪節本である。この現象は張竹坡本の場合も違わないが、詞話本發見以後は詞話本の系統が刊行の主流となる。最近のテキストには刪節はあるが、注釋の附いた詞話本の排印本、白維國・卜鍵校註の『金瓶梅詞話校註』（一九八五・岳麓書社）、および梅節重訂、陳紹・黃霖註釋『金瓶梅詞話重校本』（一九九三・香港啓文書局）がある。

第二は、『新刻繡像批評金瓶梅』二十卷百回。毎回前有圖兩幅。有弄珠客序。北京圖書館藏本をはじめいくつか異なる刊本が存在する。插圖に題された刻工名が明天啓・崇禎間の新安の刻工であること、崇禎帝の諱を避けていることなどから崇禎刊の刊行とされ、崇禎本とも呼ばれる。最近になって影印・排印されたのでそれほど苦勞しなくとも見られるようになった。一つは北京大學圖書館藏本の影印本（一九八八・北京大學出版社）、もう一つは齊煙・汝梅による會校本が一九八九年齊魯書社により排印本となり、翌一九九〇年香港三聯書店・臺灣曉園出版社により重印された。第三は清の張竹坡が編纂しなおした『張竹坡批評第一奇書金瓶梅』百回。康熙乙亥謝頤序。康熙乙亥（三四年西紀一六九五）皋鶴堂刊本が原刊本で、清代流行の祖本となった。刻本によっては書名を『多妻鑑』とか『鍾情傳』と變えたものもある。魯迅が最初に見たのはこの「第一奇書」本の系統のものである。このテキストも近年になって排印本

が出版されたが、まだ一部刪節の箇所があるようである。『張竹坡批評第一奇書金瓶梅』（一九八八・齊魯書社）、王汝梅校注『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』（一九九四・吉林大學出版社）がそれである。

謝頤「批評第一奇書金瓶梅敘」云「金瓶」一書、傳爲鳳洲門人之作也、或云櫛鳳洲手。然纒纒洋洋一百回内、其細針密綫、每令觀者望洋而嘆。今經張子竹坡一批、不特照出作者金針之細、兼使其粉膩香濃、皆如狐窮秦鏡、怪窻温犀、無不洞鑿原形、的是渾「艷異」舊手而出之者、信乎爲鳳洲作無疑也。然後知「艷異」亦淫、以其異而不顯其艷。「金瓶」亦艷、以其不異則止覺其淫。故懸鑑燃犀、遂使雪月風花、瓶罄篋梳、陳莖落葉諸精靈等物、妝嬌逞態、以欺世于數百年間、一旦潛形無地、蜂蝶留名、杏梅爭色、竹坡其碧眼胡乎。向弄珠客教人生憐憫畏懼心、今後看官睹西門慶等各色幻物、弄影行間、能不憐憫、能不畏懼乎。其視金蓮、當作弊屣觀矣。不特作者解頤而謝覺、今天下失一「金瓶梅」乾隆丁卯本「失」字作「知」。添一「艷異編」、豈不大奇。時康熙歲次乙亥清明中浣秦中覺天者謝頤題于皋鶴堂。（康熙乙亥在茲堂本「批評第一奇書金瓶梅」卷首。今據黃霖編「金瓶梅資料彙編」一九八七・中華書局本）

『金瓶梅』の作者。清初の宋起鳳が「稗說」卷三で王世貞說を打出して以來、清一代を通じてそれが有力な説となつた。謝頤の序の説も宋起鳳の説を繼ぐものである。しかし近代に入つてからは正に諸説紛々で、ある統計では作者に擬せられた人間は實に二十七人にのぼる。今もつて定説はない。

『小説舊聞鈔』『金瓶梅』引顧公燮（消夏閑記摘鈔上）云、太倉王忬家藏清明上河圖、化工之筆也。嚴世蕃強索之、忬不忍舍、乃覓名手摹贗者以獻。先是、忬巡撫兩浙、遇裒工湯姓、流落不偶、攜之歸、裝潢書畫、旋薦於世蕃。當獻畫時、湯在側、謂世蕃曰、「此圖某所目覩。是卷非真者、試觀麻雀小脚、而踏二瓦角、櫛此便知其僞矣。」世蕃恚甚、而亦鄙湯之爲人、不復重用。會俺答入寇大同、忬方總督薊遼、鄢懋卿嗾御史方輅劾忬禦邊無術、遂見殺。後范長白公



(允臨) 作一捧雪傳奇、改名莫懷古、蓋戒人勿懷古董也。忬子鳳洲(世貞) 痛父冤死、圖報無由、一日偶謁世蕃、世蕃問、『坊間有好看小説否。』答曰、『有。』又問、『何名。』倉卒之間、鳳洲見金瓶中供梅、遂以『金瓶梅』答之、但字迹漫滅、容鈔正送覽。退而構思數日、借『水滸傳』西門慶故事爲藍本、緣世蕃居西門、乳名慶、暗譏其閨門淫放。而世蕃不知、觀之大悅、把玩不置。相傳世蕃最喜修脚、鳳洲重賂修工、乘世蕃肅心閱書、故意微傷脚迹、陰擦爛藥、後漸潰腐、不能入直。獨其父嵩在閣、年衰遲鈍、票本擬批、不稱上旨。上寢厭之、寵日以衰。御史鄒應龍等乘機劾奏、以至於敗。噫、怨毒之於人、甚矣哉。

〔魯迅〕案、鳳洲復讎之說、極不近情理可笑、而世人往往信而傳之、異說尙多、今不復錄。

『金瓶梅』著作の動機をめぐっては小説仕立ての復讐説がいくつかある。『小説舊聞鈔』が擧げる顧公燮の説は、沈德符が『萬曆野獲編』補遺の二で述べる「清明上河圖」の件と『金瓶梅』とを結びつけたものである。しかし報復説は『金瓶梅』が刊本になった當時すでに噂としてあつたもので、そもそも詞話本の甘公の跋に「『金瓶梅傳』爲世廟時一鉅公寓言、蓋有所刺也」と言い、さらに明の屠本峻『山林經濟籍』は「相傳嘉靖時、有人爲陸都督炳誣奏、朝廷籍其家。其人沉冤、託之『金瓶梅』。」と言う。(ともに黃霖『金瓶梅資料彙編』卷一・三)。宋起鳳の説は「其人」を王世貞として王世貞著者説を打出したものである(本篇4参照)。唐順之に對する復讐説としては『全集』注は『寒花盦隨筆』を引く。これは著者も書も未詳らしく、『金瓶梅』關聯の研究資料集もみな蔣瑞藻の『小説考證』から轉引する。おそらく清末民初の説であろうが、全く小説と言つてよい。

蔣瑞藻『小説考證』引『寒花盦隨筆』云、世傳『金瓶梅』一書、爲王弇州先生手筆、用以譏嚴世蕃者。書中西門慶、櫟世蕃之化身。世蕃小名慶、西門亦名慶。世蕃號東樓、此書櫟以西門對之。或又謂此書爲一孝子所作、用以復其父仇

者。蓋孝子所識一巨公、實殺孝子父、圖報累累、皆不濟。後忽偵知巨公觀書時、必以指染沫、翻其書葉。孝子乃以三年之力經營此書、書成、粘毒藥於紙角。覬巨公出時、使人持書叫賣於市曰、「天下第一奇書。」巨公於車中間之、櫛索觀。車行及其第、書已觀訖、嘖嘖歎賞、呼賣者問其值。賣者竟不見、巨公頓悟爲人所算、急自營救、已不及、毒發遂死。今按二說皆是、孝子櫛鳳洲也、巨公爲唐荆川。鳳洲之父忬、死於嚴氏、實荆川譖之也。姚平仲『綱鑑挈要』載殺巡撫王忬事。注謂、「忬有古畫、嚴嵩索之、忬不與、易以摹本。有識畫者、爲辨其贗。嵩怒、誣以失誤軍機、殺之。」但未記識畫人姓名。有知其事者、謂識畫人即荆川。古畫者、『清明上河圖』也。鳳洲既抱終天之恨、誓有以報荆川、數遣人往刺之、荆川防護甚備。一夜、讀書靜室、有客自後握其髮、將加刃、荆川曰、「余不逃死、然須留遺書囑家人。」其人立以埃。荆川書數行、筆頭脫落、以管就燭、佯爲治筆。管櫛毒弩、火熱機發、鏃貫刺客喉而斃。鳳洲大失望。後遇於朝房、荆川曰、「不見鳳洲久、必有所著。」答以『金瓶梅』。其實鳳洲無所撰、姑以誑語應爾。荆川索之切、鳳洲歸、廣召梓工、旋譟旋刊、以毒水濡墨刷印、奉之荆川。荆川閱書甚急、墨濃粘、卒不可揭、乃屢以指潤口津揭書。書盡、毒發而死。或傳此書爲毒死東樓者、不知東樓自正法、毒死者實荆川也。彼謂以三年之力成書、及巨公索觀於車中云云。又傳聞異詞爾。不解荆川以一代巨儒、何渠甘爲嚴氏助虐、而卒至身食其報也。(黃霖編『金瓶梅資料彙編』三)

王世貞の父王忬と唐順之の間には、古くから因縁話があつたらしく、康熙・乾隆間の文人楊椿が「重ねて吳子瑞に與うるの書」(黃霖編『金瓶梅資料彙編』三)で、王忬の死は唐順之に關わらないことを考證し(後に李慈銘が『桃花聖解盒日記』ないし『越縵堂讀書記』で同じことを述べる)、王忬が嚴嵩に献上した古畫を唐順之が偽物と暴露し、そのため嚴嵩が怒つて王忬を極刑に處したとか、唐順之の死は王世貞兄弟が刺客をやとつて殺したという説があることを紹介し、「小人之好議論、詆誣先達類如此」と一笑に附している。寒花盒の説はそうした議論に更に脚色を加え

たものである。

張竹坡「苦孝說」云、夫人之有身、吾親與之也。則吾之身、視親之身、爲生死矣。若夫親之血氣衰老、歸於大造、孝子有痛於中、是凡爲人子者所同、而非一人獨具之奇冤也。至於生也、不幸其親爲仇所筭、則此時此際、以至千百萬年、不忍一注目、不敢一存想、一息有知、一息之痛爲無已、嗚呼痛哉。痛之不已、釀成奇酸、海枯石爛、其味深長、是故含此酸者、不敢獨立默坐、苟獨立默坐、則不知吾之身、吾之心、吾之骨肉、何以慄慄焉如刀斯割、如蟲斯噬也。悲夫、天下尙有一境焉、能使斯人悅耳目、娛心志、一安其身也哉。蒼蒼高天、茫茫厚地、無可一安其身、必死乃庶幾矣。然吾聞死而有知之說、則奇痛尙在、是死亦無益於酸也。然則必何如可哉。必何如而可、意者生而無我、死而亦無我。夫生而無我、死而亦無我、幻化之謂也。推幻化之謂、既不願爲人、又不願爲鬼、並不願爲水石、蓋爲水爲石、猶必流石人之淚矣。嗚呼、蒼蒼高天、茫茫厚地、何故而有我一人、致令幻化之難也。故作「金瓶梅」者、一曰含酸、再曰抱阮、結曰幻化、且必曰幻化孝哥兒、作者之心其有餘痛乎。則「金瓶梅」當名之曰奇酸誌苦孝說。嗚呼、孝子孝子、有苦如是。(在滋堂本「第一奇書金瓶梅」。今據黃霖編「金瓶梅資料彙編」)

張竹坡はむろん巷間に「金瓶梅」復讐動機説が漫衍していたのを踏まえてこうした言説をなすが、この時點ではまだ王世貞著者説を明言しているのではない。

3 『金瓶梅』全書……、以至法名明悟

一七十三

「因、亦以淫縱暴卒」の「因」字を、「大略」鉛印本が缺くほかは、異體字の使用があるのみで「史略」各版との相異はない。

「小説的歴史的變遷」五云、其最著名的、是「金瓶梅」、書中所叙、是借「水滸傳」中之西門慶做主人、寫他一家的

事迹。西門慶原有一妻三妾，後復愛潘金蓮，醜其夫武大，納她爲妾。又通金蓮婢春梅。復私了李瓶兒，也納爲妾了。後來李瓶兒、西門慶皆先死，潘金蓮又爲武松所殺，春梅也因淫縱暴亡。至金兵到清河時，慶妻携其遺腹子孝哥，欲到濟南去，路上遇着普淨和尚，引至永福寺，以佛法感化孝哥，終于使他出了家，改名明悟。因爲這書中的潘金蓮、李瓶兒、春梅，都是重要人物，所以書名就叫『金瓶梅』。

4 作者之于世情，以至加以筆伐而已

『大略』鉛印本と『史略』各版との間に異同はない。

「小説的歷史的變遷」五云、明人小説之講穢行者、人物每有所指、是借文字來報夙仇的、象這部『金瓶梅』中所說的西門慶、是一個紳士、大約也不外作者的仇家、但究屬何人、現在無可考了。至于作者是誰、我們現在也還不知道。有人說、這是正世貞爲父報仇而做的、因爲他的父親王忬爲嚴嵩所害、而嚴嵩之子世蕃又勢盛一時、凡有不利于嚴嵩的奏章、無不受其壓抑、不使上聞。王世貞探得世蕃愛看小説、便作了這部書、使他得沈涵其中、無暇他顧、而參嚴嵩的奏章、得以上去了。所以清初的翻刻本上、就有「苦孝說」冠其首。但這不過是一種推測之辭、不足信據。『金瓶梅』的文章做得尚好、而王世貞在當時最有文名、所以世人遂把作者之名嫁給他了。後人之主張此說、并且以「苦孝說」冠其首、也無非是想減輕社會上的攻擊的手段、并不是確有什麼王世貞所作的憑據。

『金瓶梅』の筆力について同類の意見の例として、宋起鳳の説を舉げておく。

『稗説』卷三「王弇洲著作」云、世知『四部稿』爲弇洲先生平生著作、而不知『金瓶梅』一書、亦先生中年筆也。稗有知之、又惑於傳聞、謂其門客所爲書。門客詎能才力若是耶。弇洲痛父爲嚴相嵩父子所排陷、中間錦衣衛陸炳陰謀擊之、置于法。弇洲憤懣懟廢、乃成此書。陸居雲間郡之西門、所謂西門慶者、指陸也。以蔡京子比相嵩父子、諸狎昵比

相嵩羽翼。陸當日蓄羣妾、多不檢、故書中借諸婦一一刺之。所事與人皆寄托山左、其聲容舉止、飲食服用、以至雜俳戲蝶之細、無一非京師人語。書雖極意通俗、而其才開合排蕩、變化神奇、于平常日用、機巧百出、晚代第一種文字也。按弇洲『四部稿』有三變。當西曹至青州、機鋒括利、立意遷□、尙近刻畫。迨秉郟節、則巉刻之迹盡去、惟氣格體法尙矣。晚年家居、濫受羔雁諛墓祝觴之言、二氏雜進、雖耽白蘇、實白蘇弩末之技耳。是一手猶有初中晚之殊、中多情筆、斯誠門客所爲也。若夫『金瓶梅』全出一手、始終無懈氣浪筆與牽強補湊之迹、行所當行、止所當止、奇巧幻變、嫵妍、善惡、邪正、炎涼情態、至矣。盡矣。殆『四部稿』中最化最神文字、前乎此與後乎此誰耶。謂之一代才子、洵然。世但目爲穢書、豈穢書比乎？亦楚『檣杵』類歟。聞弇洲尙有『玉（嬌）麗』一書、與『金瓶梅』埒、係抄本、書之多寡亦同。王氏後人鬻于松江某氏、今某氏家存其半不全。友人爲余道其一二、大略與『金瓶梅』相頡頏（頡）、惜無厚力致以公世、然亦烏知後日之不傳哉。（一九八二年江蘇人民出版社『明史資料叢刊』第二輯『稗說』。黃霖編『金瓶梅資料彙編』卷三）

5 『金瓶梅』引用文（第二八回・第四九回）

一八〇一五

『大略』鉛印本、『史略』各版の異同がいくつかある。「因令春梅」以下の潘金蓮の言葉を、相手によって分割したのは、五七年版全集以後で、三八年版全集までは一つの括弧に括られている。「等我把淫婦鞋剎作幾截子」の「剎」字を鉛印本から三八年版全集までみな「砍」字に作り、五七年版全集で「剎」に改められた。以上第二八回。第四九回では、「且休掌燈」の「燈」字、鉛印本から三八年版全集までみな「燭」に作る。五七年版で「燈」に改められたが、『金瓶梅』各本いずれも「燭」に作るので元に戻すべきである。「你如何這等愛厚」の「如何」を鉛印本より三八年版全集までみな「何如」に作り、五七年版全集で「何如」に改む。「愛厚」も同じく「厚愛」に作り、五七年版全集で改

む。これらは原文に沿って改訂されたものに従うべきである。

魯迅が據つたのはむろん第一奇書本であるが、これは版本が多くて特定できない。いま雙紅堂舊藏本（東文研藏）と吉林大學出版社本とによって異同を示すと、第二十八回、「甚麼罕稀物件」の「罕」字、吉林本は同じだが、雙紅堂本は「奇」に作る。□字には猥褻を憚つたのだろうか、これはともに「秘」、他本も變わらない。すでにあげた「等我……」の句では各本すべて「淫婦鞋」の「鞋」字を缺くが、これは魯迅が意を以て補つたと考えられる。「掠到茅厠里去」の「茅厠」は各本通じて「毛司」に作る。「我越發偏利、箇樣兒你瞧」、雙紅堂本は「我」を脱し、「刹」を「到」に誤る。第四十九回、「西門慶豫令書童連忙將端溪硯……」の「連忙」を『史略』各版は脱するが、ここは各本に従つて二字を補うべきである。無論引用の文と最もちがいの大きいのは詞話本（大安本）であり、新刻繡像批評本との差はそれほどではない。

『師弟答問集』 五四頁云、

〔増田問曰〕 222 『金瓶梅』ノ筋書ノトコロ「武松來報讎、尋之不獲、誤殺李外傳、……通金蓮婢春梅、復私李瓶兒、……」（李外傳ト李瓶兒トハ兄妹カ何カデスカ、或は無關係ノ人カ？）〔魯迅答曰〕 李外傳ト李瓶兒トハ關係ナシ。

只西門慶トシテ誤殺サレタ。

又 五四・五六頁云、

〔増田問曰〕 223 『金瓶梅』中ノ引用文：婦人道「你看他還打張鷄兒哩。瞞着我黃猫黑尾、你幹的好繭兒。……」黃猫黑尾 好繭兒 〔魯迅答曰〕〔還〕〓尙 〔打〕〓スル 〔張鷄兒〕—庭鳥ガモノヲ見ルキニ馬鹿ラシイ目ツキヲスル〓ワザト馬鹿ナフリヲスル〓オドケ 〔幹〕〓スル 〔黃猫黑尾〕—樣デナイヲ、私ノ目ノトッカナイ處ニ違ッ

タヲヲヤツテル 「好繭兒」秘ナ處ニヒキコンデ何カヤツテ居ルコ

〔増田問曰〕來旺媳婦子的一隻臭蹄子、……甚麼罕稀物件、也不當家化化的、……那秋菊拾着鞋兒說道「娘這個鞋、……」來旺ト云フ男ノ wife? 〔魯迅答曰〕 yes. 〔増田問曰〕家化〓（傢伙）？ 化—吃語？ 〔魯迅答曰〕不當家化、〓熟語。「罪デアル」ノ意 何ノ寶デアルカ、コンナニ罪アルコヲシテ（余リニ珍重スルカラ）、アル淫婦ガ死ンダ後ニ阿鼻地獄ニ陥ルコハアタリマヘダ（彼ノ女ノモノハ余リニ珍重サレタカラ） 〔増田問曰〕娘—下女ガ女主人を呼んで娘といふか？ 〔魯迅答曰〕 yes Mütter 之意

〔増田問曰〕 225 ……只見兩個唱的、……向前插燭也似磕了四個頭。插燭〓ろ—そく？ 〔魯迅答曰〕 yes 蠟燭ヲ挿スニハ、マズグデナケレバナラン ココニハ、只、マズグニ〓（行儀ヨク、恭シク）四拜シタノ意。

6 明小説之宣揚穢德者、以至不能信也

一八三三

『大略』鉛印本が「則殊難揣測」を「則頗意必」に作り、「此之事狀」の「此之」二字を闕くほかは『史略』各版と違わない。但し三版から七版まで「起先好不妖嬈嫵媚」の「起」を「超」に誤まる。

第一回引用部分、梟鶴堂本（吉林大學出版社本）も、新刻繡像批評本も、「有一處人家、先前怎地富貴」の「處」を「個」に、「怎」を「恁」に作る。詞話本にはこの一段はない。

沈德符『萬曆野獲編』は本篇7に引用する文を参照。嚴嵩は『明史』姦臣列傳に、陶仲文、陸炳については『明史』佞幸列傳にそれぞれ立傳されることを『全集』注は言う。

7 故就文辭與意象以觀『金瓶梅』、以至且每敘牀第之事也

一八二七

各版間の異同は、「僥幸者」の「僥」は五七年版全集ではじめて「僥」に作られた。それ以前は『大略』鉛印本から

すべて「徼」に作る。「而小説亦多神魔之談」の「亦」字を、改訂版から三八年版全集まで脱す。

『金瓶梅』を「淫書」と名指したのは明代にはまだないようである。しかし「穢書」としたものは幾つかある。そもそも詞話本東吳弄珠客の序にしてのつけから「『金瓶梅』穢書也」と斷言する。もつとも作者の企圖は「世戒」であると辨護するのだが、同じく明李日華『味水軒日記』には「伯遠攜其伯景倩所藏『金瓶梅』小説來、大抵市譚之極穢者、而鋒燄遠遜『水滸傳』。袁中郎極口贊之、亦好奇之過」と述べ、薛岡『天爵堂筆餘』では「友人關西文吉士以抄本不全『金瓶梅』見示、余略覽數回、謂吉士曰、此雖有爲之作、天地間豈容有此一種穢書、當急投秦火」と言う。これらがすべてその「猥黷者多」のみに注目しているわけではないけれども、「穢書」たる所以はその點にあることは疑いない。清に入ると張竹坡が其の解説で「第一奇書非淫書論」なる一章を設けてその所以を辯じている。

「方士李孜」「僧繼曉」については本書第一六篇の本文および考證<sup>1</sup>参照。盛端明、顧可學ともに『明史』佞倖列傳に立傳されることを全集注は言う。これら人物についての記述は主に次に引く『萬曆野獲編』の記事に據つていよう。『萬曆野獲編』二二云、「祕方見倖」陶仲文以倉官召見。獻房中祕方。得倖世宗。官至特進光祿大夫柱國少師少傅少保、禮部尙書、恭誠伯。祿廕至兼支大學士俸。子爲尙寶司丞。賞賜至銀十萬兩。錦繡蟒龍斗牛鶴麟飛魚孔雀羅緞數百襲。獅蠻玉帶五六圍。玉印文圖記凡四。封號至神霄紫府闡範保國弘烈宣教振法通眞忠孝秉一真人。見則與上同坐繡墩。君臣相迎送。必於門庭握手方別。至八十一歲而歿。賜四字諡。其荷寵於人主。古今無兩。時大司馬譚二華綸受其術於仲文。時尚爲庶僚。行之而驗。又以授張江陵相。馴致通顯以至今官。譚行之二十年。一夕御妓女而敗。自揣不起。遺囑江陵愼之。張臨弔痛哭。爲榮飾其身後者大備。時譚年甫踰六十也。張用譚術不已。後日以枯瘠。亦不及下壽而歿。蓋陶之術。前後授受三十年間。一時聖君哲相。俱墮其彀中。叨忝富貴如此。漢之昏卹膠。唐之助情花。方之蔑如矣。



譚差有軍功。故卹典俱無恙。陶在隆慶初元已盡削奪。陶之前則有邵元節。亦至封伯官三孤。亦得四字諡。但以年稍不久。故尊寵大遜陶。同時又有梁指甲者封通妙散人。段癩子亦封宣忠高士。恩禮不過十之一耳。成化間。方士李孜省。官通政使禮部左侍郎掌司事。妖僧繼曉。累進通玄翊教廣善國師。正德間。色目人于永。拜錦衣都指揮。皆以房中術驟貴。總之皆方技雜流也。至士人則都御史李實、給事中張善。俱紀於憲宗實錄中。應天府丞朱隆禧、都御史盛端明、布政司參議顧可學。皆以進士起家。俱以方藥受知世宗。與邵、陶諸人竝列。雖致仕卿貳宮保。俱無行之尤矣。又若萬文康。以首揆久輔憲宗。初因年老病陰痿。得門生御史倪進賢祕方。洗之復起。世所傳爲洗鳥御史是也。萬以其方進之上。旁署臣萬安進。憲宗升遐。爲司禮大璫覃昌所誚責。此其罪又浮於嘉靖朱、盛、顧諸人。櫟巖分宜亦未必肯爲。

「進藥」嘉靖間。諸佞倖進方最多。其祕者不可知。相傳至今者。若邵、陶則用紅鉛。取童女初行月事。煉之如辰砂以進。若顧、盛則用秋石。取童男小遺去頭尾。煉之如解鹽以進。此二法盛行。士人亦多用之。然在世宗中年始餌此及他熱劑。以發陽氣。名曰長生。不過供祕戲耳。至穆宗以壯齡御宇。亦爲內官所蠱。循用此等藥物。致損聖體。陽物晝夜不仆。遂不能視朝。今上保攝聖躬最爲愷慎。左右亦無敢以左道進者。岡陵之算可決也。中華書局元明史料筆記叢刊本

『師弟答問集』六四頁云、

〔增田問曰〕番外、a、「特進光祿大夫、柱國、少師、少傅、少保、禮部尙書、」コノ官名ニ句讀ヲ打テバ右ノ如クデスカ  
〔魯迅答曰〕yes

又一八頁云、〔增田問曰〕番外 原著二百二十六頁末カラ二百二十七頁初メノ邊、「紅鉛」「秋石」ニツイテ、野獲編卷二十一ニ云フ「若邵陶則用紅鉛、取童女初行月事、煉之如辰砂以進、若顧盛則用秋石、取童男小遺去頭尾、煉之如解鹽以進、……」「〔頭尾〕「解鹽」に？あり」

〔魯迅答曰〕頭尾ニ始ト終リ〔人が小便をする繪があり、その地面に近い部分を「頭ニ初メ」とし、最も遠い部分を「尾ニ仕マヒ」と説明する。〕詰リ出ル小便ノ初メノ一部分ヲ取ラナイ、終リノ一部分モ取ラナイ 解鹽、山西省解州カラ出ル塩、石塩ノ様ナ塊デナク末塩ノ様ナコマカイ粉末デモナイ。雪花ノ様ナモノデ日本ノ塩ニ似ル海水カラ取タモノハ皆コンナ形ダシカシ解塩ハ土カラ取ルモノ。

8 然『金瓶梅』作者能文、以至今多不傳

各版の間に異同はない。

その末流については劉廷璣『在園雜誌』の記述を代表としてあげておく。

近日之小説、若『平山冷燕』、『情夢栢』、『風流配』、『春柳鶯』、『玉嬌梨』等類、佳人才子、慕色慕才、已出之非正、猶不至於大傷風俗。若『玉樓春』、『宮花報』稍近淫佚、與『平妖傳』之野、『封神傳』之幻、『破夢史』之僻、皆堪捧腹。至『燈月圓』、『肉蒲團』、『野史』、『浪史』、『快史』、『媚史』、『河間傳』、『癡婆子傳』、則流毒無盡。更甚而下者、『宜春香質』、『弁而釵』、『龍陽逸史』、悉當斧碎棗梨、遍取已印行世者盡付祖龍一炬、庶快人心。然而作者本寓勸懲、讀者每至流蕩、豈非不善讀書之過哉。天下不善讀書者、百倍於善讀書者。讀而不善、不如不讀。欲人不讀、不如不存。康熙五十三年禮臣欽奉上諭云、「朕惟治天下以人心風俗爲本、而欲正人心、厚風俗、必崇尚經學、而嚴絕非聖之書、此不易之理也。近見坊肆間多賣小説淫詞、荒唐鄙俚、瀆亂正理、不但誘惑愚民、穢縉紳子弟未免遊目而蠱心焉。敗俗傷風、所係非細、應豫通行嚴禁。等諭、九卿議奏通行直省各官、現在嚴查禁止。」大哉王言、煌煌綸綍、臣下自當實力奉行、不獨矯枉一時、洵可垂訓萬禩焉。（清康熙序刻本劉廷璣『在園雜誌』卷二：黃霖編『金瓶梅資料彙編』三）

劉廷璣『在園雜誌』二云、李笠翁漁一代詞客也。著術甚夥、有『傳奇十種』、『閒情偶寄』、『無聲戲』、『肉蒲團』各書、

造意翹詞、皆極尖新。沈宮詹繹堂先生評曰、聰明過於學問。洵知言也。但所至攜紅牙一部、盡選秦女吳娃、未免放誕風流。昔寓京師、顏其旅館之額曰「賤者居」。有好事者戲顏其對門曰「良者居」。蓋笠翁所題本自謙、而謔者則譏所攜也。然所輯詩韻頗佳。其「一家言」所載詩詞及史斷等類亦別具手眼。遼海叢書本。

「肉蒲團」は一名「覺後禪」と稱し、又別刻本では「耶蒲緣」、「野叟奇語」、「鍾情錄」、「循環報」、「巧奇緣」等と別稱されると小説辭典の類は言うが、實際それほど多くの坊刻が確認されているわけではないらしい。刊本については鳳山樓刊本、醉月軒刊本、木活字本の他數種が「大塚目」に著録される。他に光緒間石印本、日本寶永刊本等がある。「情痴反正道人編次」「情隱先生編次」と題する。撰者を「在園雜誌」は李漁に擬するが、他に確證があるわけではない。「史略」がぼかした言い方をするのはそのためであろう。近刊の浙江古籍出版社版『李漁全集』は、この書を収めるが故事梗概しか載せない。

9 萬曆時又有名「玉嬌李」者、以至非當時所見本也

一三二〇

各版の間に、三八年版全集だけが「皆與袁、沈之言不類」と「袁沈」の間に點を附す以外は特段の異同はない。

「小説的歴史的變遷」五云、此外敘放縱之事、更甚于「金瓶梅」者、爲「玉嬌李」。但此書到清朝已經佚失、偶有見者、也不是原本了。

『小説舊聞鈔』『金瓶梅』引（『野獲編』二十五）云、中郎又云、「尙有名『玉嬌李』者、亦出此名士手、與前書各設報應因果。武大後世化爲淫夫、上蒸下報。潘金蓮亦作河間婦、終以極刑。西門慶則一駭愍男子、坐視妻妾外遇、以見輪迴不爽。」中郎亦耳剽、未之見也。去年抵輦下、從邱工部六區（志充）得寓目焉、僅首卷耳、而穢黷百端、背倫滅理、幾不忍讀。其帝則稱完顏大定、而貴溪分宜相構亦暗寓焉。至嘉靖辛丑庶常諸公、則直書姓名、尤可駭怪、因棄置不復

再展、然筆鋒恣橫酣暢、似尤勝『金瓶梅』。邱旋出守去、此書不知落何所。

蔣瑞藻『小說考證』續編卷一「隔簾花影」引「譚瀛室筆記」云、明沈德符顧曲雜言云、袁中郎觴政、以金瓶梅配水滸傳爲外典。中郎又云、尙有玉嬌李者、亦出此名士手筆。與前書各設報應因果、武大後世化爲淫夫、上蒸下報。潘金蓮亦作河間婦、終以極刑。西門慶則一駭男子、坐視妻妾外遇、以見輪迴不爽。中郎亦耳剽、未之見也。俞曲園嘗轉引其說、謂金瓶梅今尙有流傳本、於玉嬌李則不聞有此書。從前在書肆中、見有名隔簾花影者、云是金瓶梅後本、余未披覽、不知是否此書云云。按現在坊間流行之玉嬌李、筆意蕪陋惡劣、且所述之事、與西門慶潘金蓮等絕不相關、必係後人襲其名而別撰事實、爲魚目之混。中郎所謂與金瓶梅同出此名士手者、恐另有其書、今則久已失傳矣。至隔簾花影確係金瓶梅後本、惟西門慶易名南宮吉、吳月娘易名楚雲娘、潘金蓮易名紅繡鞋、其李瓶兒、春梅等、亦均有以意關合之名。而敘述汴京遇金人蹂躪、西門一家流離困苦、以及妻妾淫蕩猥褻之事、描寫頗淋漓盡致。所謂報應因果者、庶乎近之。筆意雖不及金瓶梅之靈活跳脫、然亦頗不弱。唯究以淫穢處太多、坊間不敢公然發售、故欲求其書、亦殊不易也。上海古籍出版社本

蔣瑞藻『小說考證』卷二「金瓶梅」按語云、又案、『玉嬌李』書、僕外舅何乃普先生家有之。曲園謂世不復有、殊非。然僕亦嘗披覽一過、用意用筆、都不甚佳。事實亦與沈氏所紀不類、豈好事者僞撰、襲其名以行耶。

『師弟答問集』五六頁云、

〔增田問曰〕、227 萬曆時又有名玉嬌李者、……袁宏道曾聞大畧、云「……武大後世化爲淫夫、上蒸下報……上蒸——左傳二「衛宣公烝于夷姜」夷姜ハ宣公ノ庶母 下報——左傳二「文公報鄭子之妃」鄭子の妃ハ文公ノ何ニ當ルヤ？〔魯迅答曰〕調ヘル本持合ハズ 目下ガ目上ト姦通スルヲ「烝」ト云ヒ 目上ガ目下ト姦通スルヲ「報」ト云フ

〔増田問曰〕ココデ上ニ烝ハ上淫、下ニ報ハ下淫ト解ス可キダト思ヒマスガ、辞源ニ報ヲ「下姪上曰報」ト解シテ烝ト同ジイ意ニナリマス、如何？〔魯迅答曰〕間違デシヨウ「衛宣公烝于夷姜」宣公ヲ中心トシテ云ヘバ「烝」、夷姜ヲ中心トシテ云ヘバ「報」デス。

又六四頁云、〔増田問曰〕『續金瓶梅』ニ金蓮ハ河間婦トナリマシタ、河間ハ地名デスカ？人名デスカ？〔魯迅答曰〕

河間ハ地名。コ、ハ、「夫ヲ謀殺シタ女」ノ意。河間ニ夫ヲ殺害シタ有名ナ女ガアツタカラ、コウ云フ名詞ガ出來タノデス。増田氏の言う『續金瓶梅』は『玉嬌李』の誤り。増田氏は魯迅のこの答えを承けて、「支那小説史」の譯注に「河間婦。夫を謀殺する毒婦をいふ、河間は地名である、其處に曾て夫を謀殺した有名な毒婦があつた、それが一般的な名詞になつたのである」と言う。ここは當然、河間の貞女が親戚の挑發と陰謀にはまつて淫婦に變貌することを描いた柳宗元の「河間傳」を擧げるべきである。魯迅の次の書簡（これは増田氏の譯本が出版されて後のものだが）で言う急には思い出せないものである。『柳宗元集』外集に所収。

又二一六—二一八頁云、〔増田問曰〕6、原著二百二十七頁九行（譯本三〇六頁ノ注）「潘金蓮亦作河間婦」右ノ「河間婦」ハ「夫ヲ謀殺スル毒婦」ト云フノハ怪シイ、「現世デ夫ヲ毒殺シタ應報デ、來世デ「夫ヲ謀殺スル毒婦」トハ不合理ダ。コレハ「性的不能者ノ妻ニナルコト」デハナイカ？——ト質問サレマシタ。ソノ理由トシテ、『河間ハ「宦官ノ名産地」トシテ古來聞エル（後漢書ヤ新舊唐書、宋史等ノ宦者傳ヲ見ルニ河間ナル字ガ屢々見エル。明史宦官傳ニハ王振、蔣琮等河間府出身ガアリ、「清稗類鈔」奄寺類ニハ「閹宦類多河間人」トアリ。但シ『宋史』宦者傳ニ據レバ開封ノ人ヲ最モ多シト爲スヤウデアアルガ、河間府ノ宦官供給地タルハ大約元明櫛チ北平定都後ノ現象ト思フ、……。』コノ解釋ハ如何デセウ。アマリ鑿穿シ過ギテ居ルデセウカ？

〔魯迅答曰〕一理モ有レバ穿鑿過ギルトモ思フ。成程河間ニ閹宦多ク出タガ併シソノ閹宦ハ人工的デ且ツ結婚シナイ。

性的不能者ノ妻ニナツタ女ヲ「河間婦」ト呼ブ例モ滅多ニ見エナイ。嘗河間ニ出タ有名ナ毒婦ノコヲ記シタモノヲ見  
タコアルト覺エテ居マスガ併シ急ニソノ書名ヲ考出セナイ。兎角先ヅ保留シテ調査ヲ待チマシヨウ。

(待續)